



文政六年の任大臣大饗(一) : 堀田正敦の『癸未記』 論攷と翻刻

著者	鈴木 道男
雑誌名	国際文化研究科論集
巻	19
ページ	174(19)-159(34)
発行年	2011-12-20
URL	http://hdl.handle.net/10097/54223

文政六年の任大臣大饗（一）

——堀田正敦の『癸未記』 論攷と翻刻——

鈴木 木 道 男

序 大臣大饗

文政六年の任大臣大饗の朝幕関係における意味
翻刻『癸未記』

序 大臣大饗

『徳川十五代史』文恭公記文政六年癸未^{マヰ}二月二日には「大広間に於て、参向の公家衆中古大饗の式に擬し、慶宴あり。事堀田正敦の記に、詳らかなり」とある。その「堀田正敦の記」こそ、本稿が扱う『癸未記』である。時の將軍徳川家斉は、前年の文政五年三月五日に従一位左大臣に昇叙転任し、あわせて左近衛大将を兼ねることとなった。慶宴の理由は「去年の春御位す、ませ給ひ御齢もいそちにミちさせ給ひしことほきをうちわたりにてもあかすおほしけるにや」とある。すなわち家斉の従一位左大臣任官と五十歳の祝である。『癸未記』は、朝廷からそれを伝達する勅使が派遣されて催された饗宴の、雅文体による、和歌も記録した文学的な記録である。その冒頭近くに、「この春例の勅使参向のついで、糸竹の道にたへたる人々をめしくハへ、雅れて御あそひ有へし」との朝廷の意向を記して「是ハ任大臣

の大饗とやらんになすらへ給ふにやあらむ」との感想が述べられている。この文を含む文脈は、室町時代以来絶えていた任大臣大饗に「擬え」て、いまさら擬古趣味をつきつけられた、朝廷のいわばアナクロニズムに対する率直な驚きを表明しているかのようにも読める。

しかし後述のように、「任大臣大饗」（大臣大饗）は、おそらく將軍と太政大臣、即ち武官と文官との長を兼ねようという家斉の宿望を満たすためには、必要不可欠な儀式（いわば通過儀礼）であり、かつまた、中古の儀礼の復興は、江戸時代初期から幕府にそれを働かかけていた朝廷が望むところでもあった。従一位叙任と左近衛大将兼任は、第三代將軍徳川家光以来のことであり、朝廷はそれにふさわしい儀礼を整えたのである。これは「擬し」たものではなく、内実は真の任大臣大饗であった。そしてそれを求めたのはむしろ家斉の側であったと考えられるのである。この「大饗」の三年の後、家斉は実際に太政大臣に昇任している。内大臣・右大臣・左大臣・太政大臣のすべてに順に着任したのは、武家では平清盛以来のことであった。江戸時代に、「大臣大饗」はこの文政六年と、家斉が太政大臣に任ぜられた翌年の文政十年に挙行されているのみである。平安時代の任大臣大饗は、通常は左右大臣任官の際に挙行されるもの

で、内大臣および太政大臣任官の際にも行われることがあった。文政十年の儀礼も管弦を伴う大臣大饗の形式を踏んでいる。⁽¹⁾これらの「大饗」は、徳川の栄華の絶頂を象徴するものでもあろう。本稿は文政六年の大饗の朝幕関係における意味を考察し、あわせて、『癸未記』テキスト全文の翻刻を試みたものである。本稿を含む一連の研究では十分に論じることができないものの、管見ではまだ研究の粗上に上ったことがないと思われるこのテキストは、当時の朝廷が想定していた復古の様相を実際に示しており、中古の大饗と比較すること興味深い。文学史・政治史・服飾史（正敦はみずから「あまりにさうぞくのことかぞへたてむもくさくしとてやミぬ」と述べるほど、詳しく使者等の服装を述べ立てている）⁽²⁾など広い分野に、決して小さくはない資料的価値を持つと思われる。本稿はまた、堀田正敦（一七五五—一八三三）に関する筆者の一連の研究の一部をなす。この大饗当時、即ち晩年の正敦の幕閣内における位置と対朝廷政策生成に関する振る舞いについては、次稿において詳細に検討を加えることとしたい。

平安時代に行われていた饗宴儀礼のうち、大饗と呼ばれるものには中宮大饗と東宮大饗（以上を二宮大饗という）、そして大臣大饗（任大将大饗を含む）があるのみである。すなわち饗宴儀礼としての大饗大饗は格式が高い。『延喜式』巻二十一雅楽寮に二宮大饗は「官人率楽人等供奉」とあり、続けて「大臣大饗亦同」とあるように、伶人の管弦を伴う大規模な儀式的饗応であった。左右大臣に任官すると、就任直後（任大臣大饗）と、その後の毎年正月に（正月大饗）大納言以下（初期は親王が招かれた）を大臣邸宅、即ち宮中などではなく大臣の自邸に招き、饗宴を繰り広げてきたのである。これを

総称して大臣大饗という。料理を始め、大饗のもっとも具体的な記録に関しては、『群書類従』収録の『類聚雜要抄』にみえる「大臣家節供」や「大饗^{（母屋座・平座・大座）}」、そして簡略化した大臣大饗である「臨時客饗」の各項に当たりたい。

神谷正昌氏が簡潔に記述した平安時代の基本的な大臣大饗の式次第（神谷一九九八）によれば、「まず大饗を催す大臣家から、主人の大臣とともに饗応する側となる親王家へ使者が、また、招待される側の主賓となる尊者の邸宅へ掌客使が派遣される。一方、朝廷からは、大臣家に対し饗の禄と雅楽の用意がなされ、さらに蘇甘栗使が派遣される。尊者到着後、招かれた公卿たちは中門外から南庭に入り列立し、尊者以下は主人の大臣に拝礼してから殿に昇り座に着す。そして宴座が始まり、一献から六献あるいは七献まで続くが、途中の三献において、史生や鷹飼・犬飼に勧盃する史生召・鷹飼渡、さらに奏楽や左右舞が行われる。続いて穩座に移り、盃事のほか管弦・糸竹などの芸能が行われる。最後に、史生・外記・史・弁・少納言・参議・納言に禄を、尊者・親王に禄と引き出物をそれぞれ賜い、尊者以下が退出して終了することとなる」。

鎌倉時代には、大臣大饗は武家とは無関係に朝廷関連行事として行われた。三代征夷大將軍源実朝は右大臣に任官しているが、大饗は行われていない。ただし、正敦が『癸未記』に調査結果を記しているように、「武家の世」（正敦は室町時代以降をこう呼んでいる）となつてからは、文政六年の前に、足利幕府の時代に三度の記録がある。⁽³⁾一つは南北朝の時代、足利義満によつて永徳元年（一三八二）に催されている。⁽⁴⁾天皇は義満が擁立した北朝第五代後円融天皇（一二三三—一三三三）在位一三七二—一三八二である。続いて足利義宣が

永享四年（一四三二）に開く。このときの天皇は後花園天皇（在位一四二八―一四六四）。義政に詩を送り、応仁の乱で疲弊した民を思い、奢侈を控えるべく戒めたことで知られる。最後は足利善政が長祿二年（一四五八）に催した。天皇は同じ後花園天皇である。文政六年の大臣大饗は、実に四六五年ぶりに催されたものであることになる。

『癸未記』は文政六年の三月一日から五日にわたる大饗の諸行事と三月一日に行われた老中青山忠裕と若年寄堀田正敦に対する内々の褒賞、および五月一日に幕府から朝廷に追贈された贈答品を記述しているが、古式に則れば一日で終了する任大臣大饗の実質は三月一日から五日の五日間に拡大され、規模もはるかに大きくなったと見ることができる。大饗の祿は、三月三日に左大臣家斉による糸竹の楽器の観賞の後、三月四日に暇乞いがあった際に、家斉の側から提供されている。

『癸未記』に拠って、三月二日の主要饗宴とその前後のあらましを素描する。事前に当然行われるべき、招待される側の主賓となる尊者（当大饗の場合は勅使と院使）の邸宅への掌客使の派遣など、大饗前後の諸儀礼については記述がない。

三月朔日、朝廷からは「勅使院使のほか公卿六人献上人ひとりかく所のもの十七人」とあるとおり、楽所の伶人を含めて二十六名が招かれている。白木書院で、両御所が例年のごとく参向した勅使院使らに対面する。広橋一位藤原胤定・甘露寺前大納言藤原国長・院使冷泉前中納言藤原為訓、ほか徳大寺大納言藤原実堅・四辻前大納言藤原公万・同中納言藤原公説、綾小路前中納言源俊資・同三位源有長、持妙院三位藤原基延が対面を受け、殿上人花園美作権介四位藤原実路が献上人をつとめている。

二日には黒木書院に両御所と三家三卿から布衣までが居並ぶなか、「徳大寺大納言花園権介ハ、四辻大納言和琴、同中納言綾小路三位さうのこと、父の中納言しやく拍子とりてあなたうとうたひ出せるに、綾小路持明院の両三位ともに声うちそひたまへハ、かくそのものともまちとりて、折にあひたる双調に吹いてつゝ、堂上にてもひきあはせたる玉琴のこゑく、空にすゐわたり雪をふらし瓦をくたくハかりになむおほえけり」という雅の世界が展開する。公卿らには一人ひとり幕府側から接待の役が付けられる。幕府側からはまた、正敦を始め、敷島の道に通じた諸侯の面々と、幕府歌学方北村季文が和歌を添える。すなわち、いわゆる機会詩（*Gellegenheitsgedicht*）が詠まれ、料理が供され、また雅楽演奏に対する祿が供される。これも「いにしへ大けうのろく納言に白掛参議に紅のうちきなど見えしになすらへられしにやあらむ」（¹³⁷）とある通り、古式に則ることを意図したものである。正敦はこの日の宴会の描写に紙数の大半を割いている。

三日には伶人とともに演奏にあたった四辻大納言以下が左大臣に楽器を披露、銘が確認される。儀式的饗宴は行われていない。

同四日にも白木書院で両御所の対面があり、暇乞いする面々に、家斉から昇任伝奏に対して少なからざる祿が供される。祿には金子のほか、中古、「主客の人格的結合を強固ならしめる」（山下二〇〇三）ための御身の代として認識されていた衣服の代わりにあたることが意識されたものか、わたや古服等も供されている。

五日には大広間で参向した人々にまた対面があり、幕府側から猿楽（能）が披露されている。

文政六年の任大臣大饗の朝幕関係における意味

『癸未記』の末尾は「かくいふは文政むとせやよひのことなりけり」と閉じられている。従って当然のことながらこの癸未（きび、みずのとひつじ）は文政六年である。清書にあたった豊原文秋の最後の一行からも明らかのように、『癸未記』は文政六年（一八二三）の五月十九日以前には成立している。陰陽五行において、癸未は相剋であり、「土剋水」であるが、正敦はことさらに癸未に意味を込めたわけではなく、ただこれを年号にかえて用いた表題であろうと思われる。一連の大饗行事の記述の後、「十あまりひとひ、こたびのあらましようけたまはりしとはなかりしかと、もはら其事にかゝつらひし勞をおほしめされしとて肥後守忠英^{（はつしゅん）}してうちくよりさゝ山侍従へ後藤廉乗かつくれる蘿蔔の三所ものをたまひ正あつにもよにさうふ革とよひてもてはやせる染かは三むらを恩賜あり」と、特段の褒賞があったことが述べられていることから明らかのように、当時すでに幕府の若年寄を三三年ほど勤めていた老練の若年寄堀田摂津守正敦は、その手配の実務を丹波篠山藩主、老中青山忠裕とともに中心となつて推進したものと思われる。『癸未記』の歴史的記述的確さが示すところからして、正敦はこの儀式の歴史と形態に関する調査の責任者であつたと推測される。忠裕は後にも家斉の太政大臣就任の立役者となつていた。

正敦は、四十余年にわたる加筆校訂を経て江戸時代最大の鳥類図鑑となつた自著『観文禽譜』（一八三一年完成）の自序冒頭に「萬のことふみにしるし、絵にかくはかり長くつたふへきはなし。我國のいにしへはさらなり。もろこしのひしりの御代のありさまも、ふみ

にしるし絵にかきたれはこそ、今の世にも残りつれ、たゞにいひつぎかたりつがむに、いかでか永くつたふへきや。されば、おほやけにまれ、わたくしにまれ、みやひたること、はかなきわさにても、すこしかどあるかきりは、うつしえとなし、それがこはりをしるして、わか子むまこにつたへむと思へり。」と述べて諸事の記録と学問に対する嗜好を示している（堀田二〇〇六一四頁）。『癸未記』もこれをありありと示すかのような作品である。ただし、徳川家支配の絶頂期を実感せしめるこの「大饗」を描く絵画作品は、残されていないようである。正敦は文化九年には、自身が編集総裁を務めた『寛政重修諸家譜』を、一三年余りの作業を経て完成させている。くわしくは次稿に譲るが、正敦は諸行事の記録にはさまざまな形で才能を発揮しているのである。

ちなみに林忠英は家斉の御側御用取次であつた七千石の旗本である。「大饗」の二年後には若年寄に進み、三千石の加増をうけて諸侯に列した。これは御側御用取次から大名となつた例としては極めて遅いものに属する。

徳川家斉（一七七三—一八四一）は江戸幕府第十一代征夷大將軍を長きにわたつてつとめた（在位一七八七—一八三七）。大饗当時の天皇は仁孝天皇（在位一八一七—一八四六）である。讓位して桜町殿に遷御し、院政を開いた実父光格天皇（在位一七七九—一八一七）の意を受け、のちに学習院となる学舎をひらくことを命じたことで知られる。学舎は天皇の没後一八四七年に学習所として開設された。

光格天皇（一七七九—一八四〇）は、実父の典親親王に太上天皇の尊号を贈ることを画策し、朱子学を楯とする松平定信に拒絶された、いわゆる尊号一件（一七八九—一七九三）で知られる。「大饗」

が催されたのはこの定信の存命中のことである。光格天皇は、尊号一件で定信に決定的な反感を持っていたが、家斉にも同様の事情があった。実父一橋治済（一七五一—一八二七）に対して「大御所」の尊称を贈ろうとしたにもかかわらず、朝廷に対しても尊号授与を拒否していた定信によってそれを阻止された家斉にも、定信に対する消し難い強烈な反感が残存していたのである。大御所の件では、家斉は定信を斬ろうとしたが、御側御用取次平岡頼長の「越中守よ。御刀賜ふに。はやう拝戴せよ」と言って家斉の氣勢を削ぐ機転によって、あやういところで事なきを得た（顛末は『続徳川実紀』文恭院御実紀附録卷二冒頭に詳しい）。この事件が定信失脚の要因のひとつともされる。光格天皇と徳川家斉、即ち朝廷と徳川家はともに、定信を介して尊号尊称に対するルサンチマンを長く共有していたといえるかもしれない。

ただし幕閣では、『癸未記』の頃も依然「寛政の遺老」たちが指導的な位置を占めており、堀田正敦もその一人に数えられる。興味深いことに、尊称をめぐる定信とかつて対立した家斉が、長年を経てから蒸し返した諸問に対し、老中就任直後の青山忠裕は、健在である治済に追尊することの無理を説いて、家斉に「げに御至孝といひつべし。されど国家の制儀にあらず（中略）定信等が申上し言は万世の公議」であると述べて諫めている（同じく『続徳川実紀』文恭院御実紀附録卷二冒頭参照）。これは尊号一件が決着した寛政五年の十一年後に当たる文化元年のことである。家斉の執念を感じざるを得ない。そして結局は、同じ忠裕が、さらにその二十三年後に当たる文政十年に一万石の加増を受け、六万石を得ているのである。タイミングから見て、これは家斉の太政大臣就任に功ありとしたも

のであることは疑う余地がない。尊号・尊称の授与には朱子学的実践儒教における「大義名分」すなわち「忠」が「孝」に対して優先された処理がなされたことになる。しかし朝廷による過分な叙任や官位の上昇は全くこれとは矛盾しないものであったらしい。藤田寛氏（藤田一九九九）は、太政大臣就任に係る朝廷との微妙な事項の折衝においては、將軍→老中→所司代→関白→天皇・上皇という、武家伝奏を介さないルートで合意形成が図られたことを明らかにしている。これは老中の采配がなければありえないことで、文政六年の大饗への関与が示す通り、昇任に係る問題で中心になって動いていたのは忠裕意外には考えられない。現在までに朝廷側の資料から具体的に裏付けることが出来ていないが、左大臣昇任に係る「大饗」においても、忠裕および正敦が実際に太政大臣昇任のときと同様の役割を演じたことは明らかである。なぜなら、同じ藤田氏が、甘露寺国長の『国長卿記』にみえる京都所司代の問い合わせを引いて、家斉の太政大臣就任に関して、「四年前、文政五（一八二二）年の従一位左大臣への昇進をだいたいの目安とすることができた」ことを明らかにしており（八頁）、さらにまた、同じ老中が指揮した二つの饗宴すなわち「任大臣大饗」と太政大臣就任の際の大饗にあたる儀式の様式^⑤の、とくに禄の配分等を含む部分の形式的類似が見られることも指摘できるからである。後者での朝廷からの主たる使者も、勅使広橋一位・甘露寺一位、院使冷泉前大納言であって、文政六年の大饗と同一である。

一橋治済は結局、大御所の尊称を得られなかったが、異例の官位の昇進を遂げ、文政三年（一八二〇）には従一位に昇叙、「大饗」後の文政八年には准大臣が宣下され、没後の文政十一年に内大臣、文

政一二年一月には太政大臣が追贈されている。ちなみにこの年の五月に定信が没している。家斉の太政大臣就任までの一連の昇任劇によって、半ば自動的に諸大名に異例の官位の上昇が起こり、これを先例としないこととして収束を図る必要が生じたのはよく知られているが、それにしても治済の昇任は異常であり、大御所の尊称一件に関しては、江戸の敵が京で討たれたとみるべきである。

古式に則った文政六年の任大臣大饗は、家斉の執念が成就した第一歩を飾るものであり、この成功の道筋の延長線上に太政大臣就任がある。藤田氏（藤田一九九九）は文政から天保期の朝廷と幕府の関係の実態に焦点を当て、「大饗」の後の文政九年からの記録がある『鷹司政通日記草』をもとに、幕府が「朝廷にいわばすり寄る形で「公武殊和懇」という「公武合体」状況が生まれたことを裏付けた。文政九年の家斉の太政大臣就任は幕府の朝廷への強い働きかけで実現した。しかし幕府は、家斉はあくまでも朝廷の要請で任官したもので、それを一度は拒否したが、再度の要請で就任したという、形を整えることに執着したことも明らかにされている。幕府の用意は極めて周到であった。文政六年の大饗の場合も、『癸未記』では年が改まってからの大饗開催に幕府が応えたかのような書きぶりだが、大規模な饗宴が一朝一夕で準備できるはずもなく、朝廷にとっても古式の復活の第一歩にあたるものもあり、忠裕と当時の関白一条忠良らによって相互に周到な根回しが行われたと推察できる。その古式の幕府側からの前例調査を指揮したのが、正敦なのであろう。

文政六年以降、三十年という異例の長期間関白をつとめることとなった鷹司政通は、「家斉が父一橋治済へ准大臣を贈った「孝道」に倣うかのように、仁孝天皇の父光格上皇への「孝道」である朝覲行

幸を、幕府に認可させた。朝覲行幸とは、天皇が太上天皇または皇太后の宮へと行幸し、年始の挨拶をする儀式であるが、家斉の太政大臣就任の見返りに、この再興を認めさせた。すなわち仁孝天皇による光格上皇への朝覲行幸を認可させることによって、孝行の天皇時代の遺恨を仁孝天皇が晴らしたのである。朝覲行幸は慶安四年（二六五）二月二五日に後光明天皇が行って以来途絶えていたものが、天保八年（二八三七）に実現する運びだったのだが、光格上皇の病死によって、結局は実現されてはいなかった。とはいえ、江戸初期から朝廷は古式に則った朝儀・公事等の再興を幕府に訴え続けていた。藤田氏の主張のように、將軍の權威発揚のために、朝廷儀礼を復古再興させなければならなかった、その初期の具体例として、任大臣大饗を捉えるのが妥当であろうと考えられる。『癸未記』が描いた世界は、徳川幕府と朝廷の異例の蜜月時代を見せるものであった。

『癸未記』の浄写にあたった豊原文秋（一七八三～一八四〇）は雅楽家である。京都方と呼ばれる流派に属し、豊を姓として慣用している。明治以降は豊家を名乗っている家系の当主であった。豊原家は平安時代から明らかな系譜が確認できるといえる。京都方の多久弘の三男であったが、豊原家から離縁した収秋の後を襲って跡目を相続した。豊原家の専門は笙であったが、江戸時代から笛と右舞を兼ねる派もある。文秋の著として『筆築譜』などが知られる。『筆築譜』は能の謡を一二律で表したものを収録している（以上文秋に関して『日本音楽大辞典』の平田久雄氏と蒲生美津子氏による「豊原」の項に拠った）。東北大学狩野文庫所蔵の『豊家伝授四大曲譜』五帖一冊は文秋の筆になるもので、各末尾にある「隠岐守豊原朝臣文秋（花

押」の署名は、あきらかに『癸未記』の筆跡と同一と見ることができ。『癸未記』本文には名こそあらわれないが、『癸未記』に「樂所のものともミち山の伶人ミな束帯してかりやにあり」⁽⁷⁾とあることから、文秋は、幕府側の伶人（紅葉山の伶人）として「大饗」に参加していたものと推定できる。

以上、『癸未記』が記した文政六年の任大臣大饗の意味についての概略を述べたが、序に述べたように、紙面の都合で、時の幕閣と家斉との関係に関する事項および朝廷側の資料に基づく確認を省いた。朝廷側の関白鷹司政通および「大饗」に参加した武家伝奏甘露寺国長の日記である『国長卿記』等公家の記録の分析である。ただしこの時期の朝幕関係の重要性に鑑み、これらは改めて考究する必要がある。寛政の遺老の象徴とも呼ぶべき堀田正敦の、この時期の動向を軸に、『癸未記』の内容の詳細を吟味する作業は別稿で行うこととしたい。

注

- (1) 任大臣大饗は、通常左右大臣任官に際して、そして内大臣と太政大臣任官の際にも行われることがあるものであったが、貞観期に良房のもとで大臣大饗が成立したと推定した神谷氏（一九九八）は、「成立当初の大臣大饗は、幼帝を輔弼・後見する摂政太政大臣のみが行っていた可能性がある」としている。なお、任大臣大饗の成立時期については、山下信一郎氏は少なくとも基経の任大臣大饗に溯りうるであろうことを推測している（山下二〇〇三、二六一頁）。

- (2) 服装の記述は陪席した平士のものにまで及ぶ。「両番のさふらい各五十人すわをきてつらなりたり」⁽⁸⁾の「すわ」は珍しい表現だが、「素襦」のことだと思われる。平士たちは当時の通常の礼服を用いていたのである。

- (3) 大饗研究の先覚者倉橋正次氏は「それが現実の嚆矢であり、末尾であるとはいきれない」としつつも、承平六年（九三六）から長祿二年（四五八）までに行われた大饗を年表にしている（倉橋一九六五、四四九～四五三頁）。これには百十七回の大饗（鈴木カウント）が記録されており、足利時代には正敦の記述どおり三度（いずれも内大臣大饗）記録されている。

- (4) 義満と義政の大饗の際の献立や諸式覚えが「大饗記」として残されている。慶應義塾図書館の所蔵となり、「慶應アーカイブ」の貴重書紹介において画像に接することができる。この「大饗記」配膳等の記録も貴重なものだが、『癸未記』は参加者の副早期関する記録が豊富であることが特徴の一つである。

- (5) 平安時代の大饗の禄（ここでは給与ではなく、祝儀を意味する）について、山下信一郎氏（山下二〇〇三）は、朝廷から供されるとする倉林氏（倉橋一九六五）らの説を引きつつも、禄をどこが負担するするのか、必ずしも判然とはしておらず、主催者が自弁するものであったと見ることが十分に可能だとしている。家斉の大饗では、一方的に幕府、すなわち大臣側が負担しているようにみえる。しかし文政十年の家斉の任太政大臣大饗では、明らかに朝廷側から禄が供されるとともに、大臣側からも返礼がなされている（注（8）および（9）参照）。

- (6) 『癸未記』は一九首の和歌を収録し、そのうちの十八首は三月二日の饗宴を詠んだものである。但し、これらのすべてが大饗当日に披露されたものであるか否かは不明である。正敦のものは四首、即ち饗宴の管弦に付した笛竹の声にひかれてみやこちくと聞くもうれしかりけり

こきまぜし袖のにはひぞたゞならぬひなとみやこの柳さくらを
よそにのみき、し雲井の琴のねのいあづまにひゞく声ぞたへなる
および巻末で内々に褒賞を得たことを記した際の

やぶしわかぬ春のひかりに数ならぬかきねの草のめぐみをぞそふ

である。正敦は、老中退休後の定信の自邸「浴恩園」に集う文人らの学術的サロンを、定信とともに中心となつて運営し、和歌の競作にも励んでいた（鈴木一九九五参照）。いわゆる機会詩として詠まれたものでありながら、その水準は、他の詠み手による一五首に比して決して低くないように思われる。

（7）『続徳川実紀』文恭院殿御実紀卷六十二文政十年五月に「七日青山下野守^{前忠}御懇の御詞ありて。一万石を加禄せらる。御側土岐豊前守^{前朝}精勤をもて二千石を加禄。西城御側松平筑後守^{名正}同じ事をもて千石を加禄あり」とみえる。その後の朝廷側との交渉も直接忠裕が当たる。実紀文政十年六月には「五日青山下野守御昇進により。別に京都へ御使命ぜられいとまたまふ金。時服。御羽織。御馬を下さる」とある。

（8）『続徳川実紀』文恭院殿御実紀卷五十八文政六年にみえる、この「大饗」に関する記事は以下の通り。

三月朔日白木書院へ 両御所出たまひ。勅使広橋一位胤定卿。甘露寺前大納言国長卿。院使冷泉前大納言為訓卿御対面あり。 両御所へ新年のまいらせもの例に同じ。 主上水痘酒湯の御祝として。 内より綾。 仙洞より紗綾。 大宮。 准后より縮緬。 内府へは 内より^{品名}仙洞より綾子。 大宮。 准后よりおの／＼紗綾を進らせらる。撰家。門跡。勾当内侍の使者例の如し。次に公卿。また管弦御聴聞あるべきによりて参向ありし徳大寺大納言実堅卿。四辻大納言公萬卿。おなじき中納言公説卿。綾小路前中納言俊資卿。おなじき三位有長卿。持明院三位

基延卿。花園美作権介実路。また大納言実堅卿^{寺大}には御継統を質し。前大納言国長卿^{寺甘}には伝奏を謝して御対面謁見あり。次に公卿の家司。および伶人。冠帽末広師にいたるまで拝謁す。かくて 勅使。院使の旅館へ高家戸田中務大輔御使して樽肴をおくらせらる。上巳の御祝として。日光門主および三家のかた／＼よりまいらせもの例のごとし。○二日管弦聴聞したまふにより。水紀のかた／＼はじめ。高家。詰衆。奏者番。布衣以上まうのぼる。 両御所は表へ出たまひ。やがて大広間へわたらせられて御聴聞あり。ものたまひ。はて、公卿殿上人および出仕の人々席々にして饗せられ料理を下さる。○三日上巳の御祝規のごとし。○四日京地への御返詞例のごとし。管弦御聴聞により参向の公卿殿上人。および撰家。門跡の使者はじめ。すべて暇たまはり賜物あり。 （中略） ○五日 勅使。院使。および堂上がた饗応の猿楽あり。よて水紀のかた／＼はじめ。溜詰。譜第の大名。高家。詰衆。奏者番。布衣以上。法印法眼の医員にもまうのぼる。楽は翁。三番叟。養老。箴。六浦。石橋。祝言呉服。狂言三番。宝の槌。福の神。石橋間なり。要脚。広蓋あり。はて、席々にして饗せられ料理を下さる。」

なお巻五十八末にも「三月二日管弦御聴聞あるにより水戸宰相。成島司直。新見正路など聴文あり」との補遺がある。

（9）『続徳川実紀』文恭院殿御実紀卷六十二文政十年三月にみえる、この「大饗」に関する記事は以下の通り。『癸未記』との関連の重要性に鑑み、冗長の誇りを恐れず関係部分をすべて引く。

「十五日白木書院へ 両御所出たまひ。勅使広橋一位^冠胤定卿。院使冷泉前大納言^{則為}御対面あり。歳首の御祝。 両御所へ。 禁裏。仙洞。 大宮。 女御より例の如し。 若君へまたおなじくまいらせらる。次に鷹司閔白はじめ撰家。門跡の使者。公卿。おなじく家司。伶人。

冠帽子末広師にいたりてまみえたてまつる。かくてその旅館へ高家宮原彈正大弼御使として塩鶴。樽をおくらせる（中略）○十六日（中略）日光門主上巳の御祝として二種一荷まいらせる。○十八日御昇進太政大臣に任じたまひ。内府御位階從一位に叙したまふにより。五位以上のともがら束帶を着す。かくて白木書院へ。両御所出たまひ。高倉太夫出座して見えたてまつり。御所御装束御衣紋。内府御衣紋の御式あり。次に土御門陰陽頭出座して見えたてまつり。両御所御身固の事あり。次に三家のかたぐはじめ。溜詰等見えたてまつり。大広間へ出たまひ。勅使広橋一位^{定鳳}甘露寺一位^{長國}。院使冷泉前大納言^{明為}。女御使藤谷右兵衛督出席着座す。告使栗津因幡守庭上にあり。御昇進と呼ぶ事二声。次に。詔書覽箱に入れ。堤中務少輔持出て。水野出羽守請取て御前に備ふ。御拝覽済ませられて御納戸構へ納められ。はて、下段にして堤中務少輔に時服を賜う。次に青木内蔵少允官覧箱に入持出て。押小路大外記に渡す。大外記より戸田備後守に渡す。備後守御前に備ふ。上覧済ませられて。御納戸構へ堀田撰津守これを納め。從一位の御位記宮原彈正大弼持出て。内府上覧済ませられて。御納戸構へ森川内膳正これを納む。御昇進により。御所へ。禁裏より御太刀目録。黄金三枚。綿百把。仙洞より御太刀目録。黄金二枚。より御太刀目録。黄金一枚。紗綾十卷。女御よりおなじく。若君綿五十把。大宮より黄金一枚。紗綾十卷。女御よりおなじく。若君へ。禁裏より御太刀目録。黄金二枚。仙洞よりおなじく。大宮より黄金一枚。女御よりおなじく。御位階により。御所へ。禁裏より御太刀目録。黄金二枚。仙洞より御太刀目録。黄金一枚。大宮より一種一荷。女御よりおなじく。内府へ。禁裏より御太刀目録。黄金二枚。仙洞より御太刀目録。黄金一枚。大宮より二種一荷。女御よりおなじく。若君へ。禁裏より二種一荷。仙洞より一種一荷。大宮。女御よりおなじくまいらせる。さて御昇進御位階により。撰家。

宮門跡。勾当内侍の使。公卿。その家司らにいたりて見えたてまつり。ふた、び白木書院に出たまひ。三家のかたがた御対面あり。溜詰。松平越前守。松平三河守。松平豊後守。松平伯耆守見えたてまつり。黒木書院に三卿がた。紀伊太真重倫卿。いずれも今日の御祝を申上らる。同じ御祝により撰家。親王。門跡使して太刀目録を進らせられ。宿老酒井若狭守。植村駿河守これに謁す。また。御台所。御簾中へおなじ御祝として。禁裏。仙洞。大宮。女御よりの進らせものは。水野出羽守。酒井若狭守請取りぬ。かくて公卿の旅館へ高家大沢修理大夫。戸田土佐守。横瀬駿河守御使して樽肴をおくらせる。○十九日京への御返詞仰せ進らせられ。公卿帰洛の暇賜はり。広橋一位。甘露寺一位。冷泉前大納言は三御所より例の賜物ありて。別に御昇進御位階により。両御所より物たまふ。其他の公卿賜物また差あり。鷹司右大将^{熊輔}の旅館へ御使して逗留をたづねられ。花生。塩鯛をおくらせられ。又御使して帰洛のいとまあり。白銀。綿をおくらせらる。御昇進御位階により。閑院宮。妙法院宮。一乘院宮使して太刀目録をまいらす。（中略）○廿二日公卿饗応の猿楽あり、楽は（欠落）要脚。広蓋例の如し。席々に料理を賜ふ。○廿五日今朝参向の公卿発途あり。」

(10) 晩年の正敦は、筆跡に大きな変化が起きる。おそらく脳疾患によるものと思われる。但し、おそらく、この時期にはまだそれを疑う必要はないと思われる。したがってこの清書がなぜ文秋の手によって行われたかは今のところ不明である。ただし、文政一〇年の家斉の太政大臣就任の際の大饗に対して、列席していた（注（８）参照）正敦が記録を残していないのは、おそらく老齢というよりは病気によるものであろうと考えられる。

(11) 翻刻底本『癸未記』の書誌データを記す。

東北大学附属図書館狩野文庫蔵 狩第5門16870 堀田正敦著・豊原

文秋写一冊。法量は縦二七・一cm、横一九・九cm。外題 癸未記、内題 同じ。全一九丁、表紙、裏表紙とも丁子引き染め（横引）、遊紙なし、料紙雁皮紙。印記 表紙裏に「東北帝国大学図書印」¹³、右下に『荒井泰治氏ノ寄贈ヲ以テ購入セル文学博士狩野亨吉氏旧蔵書』印、裏表紙裏上部中央にゴム印黒インクで6611の番号捺印あり。やや虫あり。本書は孤本とみられる。なお、東北大学図書館による本書の呼称は「きびのき」であり、本稿ではこれを踏襲した。

文献

『続徳川実紀』第二篇文恭院殿御実紀 但し引用文の形式は割注を用いた明治三十八年経済雑誌社版の形式に倣って若干の改変を行った。

豊原文秋『豊家伝授四大曲譜』東北大学狩野文庫所蔵五帖一冊

内藤耻叟『徳川十五代史』

『類聚雜要抄』（群書類従巻第四七〇）

神谷正昌（一九九八）『大臣大饗の成立』、日本歴史学会編集『日本歴史』第

五九七号一—一六

倉林正次（一九六五）『饗宴の研究（儀礼編）』、桜楓社

鈴木道男（一九九五）『彩色の鳥の歌学書—堀田正敦の『観文禽譜』（三）—』

東北大学文学部附属日文化研究施設『日本文化研究所研究報告』第三二集、

五七—八一頁

平野健次ら監修（一九八九）『日本音楽第事典』、平凡社

藤田 覚（一九九九）『天保期の朝廷と幕府（徳川家斉太政大臣昇進をめぐっ

て）』『日本歴史』第六一六号、吉川弘文館

堀田正敦著・鈴木道男編著（二〇〇六）『江戸鳥類大図鑑』、平凡社

山下信一郎（二〇〇三）『大臣大饗管見』笹山晴生編『日本律令制の展開』

二四三—二六七

著者不明『大饗記』慶応義塾大学図書館蔵

翻刻 癸未記

あらたまの年立かへる空のけしきのうらゝかに花鳥の色にも音にも心あくがれつゝ数ならぬかきねのうちたえあそひなとせまほしき折しも去年の春御位すゝませ給ひ御齡もいそちにミちさせ給ひしことほきをうちわたりにてもあかさおほしけるにやこの春例の勅使参向のついで糸竹の道にたへたる人々をめしくハへ雅れて御あそひ有へしとのミけしきなり勅使院使のほか公卿六人献上人^{「上」}ひとりかく所のもの十七人をなむくたさりける是ハ任大臣の大饗とやらんになすらへ給ふにやあらむ抑大饗といふことはやくきゝふりにたることなれと武家の世となりて音かくたまひしことハ足利家のさかりなしり比其聞えありしよりこのかたたえてきかさりしか^{永徳元年鹿苑院義満の時を始として永享四年普賢院義宣公長禄二年慈照みん善長の時大饗ありしと見えたり}いま雲のうへにても萬の政の御いとまにハもろゝのこと^{「オ」}をすて給はぬあまりふりにしことをもおこし年比の御いさをゝもあらはし給はむ^{「ツ」}とてかくはミこと^{「オ」}のりありしならんかしきさらきはつかあまりなぬかの日に上達部うへ人ミなつとひて参向ありやよひのついたち年ことのためしかハらす両御所白書院に出させ給ひこたひ参向の人々に御たい面あり御所ハ紫にしの御所ハあか色の御ひたゝれなりうちのミつかひ廣はし一位^{「ハ」}は黄青色に菱丸のもののかりきぬあさ黄のさしぬき赤大口甘露寺前大納言^{「ハ」}仁賀いろ藤ひし^{「オ」}のもの^{「オ」}のかりきぬあさきをりもの藤丸の文の奴袴院のミつ

かひ冷泉前中納言^{「ハ」}白地に花田雲の丸の狩衣あさき織ものゝ、奴袴なり歳首のミさはふれいのことしことはてゝ三卿をはしめこたひめしくはへられし上達へ殿上人わたくしのよろこひをのへらる其人々ハ徳大寺大納言^{「ハ」}もろ眉のえほしうす色けんもんしや藤立わきのかりきぬ同じ色かたもん藤丸の奴袴四辻前大納言^{「ハ」}白練うすものから花遠もんのかりきぬ白き^{「ツ」}さしぬき同中納言^{「ハ」}胡桑色紅葉の丸ねりのうすもの浅きかたもんの奴袴綾小路前中納言^{「ハ」}ミる色鳥丸青にひ藤丸のさし貫おなしく三位^{「ハ」}うす色の花とりの文同じ色藤丸のさしぬき^{「ハ」}持妙院三位^{「ハ」}しろけん文紗から草の丸うす色緯白藤の丸かたもんのさし貫赤大口なりひとりゝいてられ下段の左に着座ありてたいめたまはるつきに殿上人花園美作権介^{「ハ」}の唐花くつしのもん紫綵の袖^{「ハ」}くゝりむらさきのさし貫なけしの外にてまみへらる大ミや人のえほしかり衣のすかたとしことにめなれしことなからいとあてやかなり

ふつかけふはうちの三使を始上達部殿上人めしてミあそひあり三家三卿のかたゝハかうふり直衣四位の人々ハつるはミ五位ハあか色の衣冠おもひゝのかさねのきぬきてまうのほらる朝のほと雨はしたなうふり出けれハかねてまうけをかれし大廣間のまへなるかりやににはかに幔引まはし火炉七つを置りこれハさうの^{「ハ」}笛つかふまつるものゝ料なりとぞ正刻する比ほひ両御所黒書院にいてさせ給ふ雨もはやをやミにけり御所ハ御なをし御たてえほしにうす色はたかた唐草のもん緋に雲立わきの出しきぬ白綾とをもんの御単花田にかた文八つ藤の御さしぬき西の御所も同じ御えほし直衣に山吹かさね大の小あふひのものの出しきぬ紅綾の御ひとへむらさきうきもん鳥襷の御奴袴を奉れり御太刀ハ今川侍従^{「ハ」}御刀采女正平胤祿^{「ハ」}

上段に御簾たれ南にむかひておはします西の御所の御座ハまへにお
なし田安中納言殿源齊清水三位中将殿式部卿源田安三位中将殿右衛門督みなもけ
ふのさハふ御らんあるへしとて御座のうしろにおらる一ツ橋三位中
将殿兵部卿源はいたはりによりてまいられす田安殿ハこれも恩賜の直衣
無もんの冠松の丸のものとくさかねのきぬ黄遠文の单清水中将殿
も同じ冠なをし小8オあふひの文花山吹のきぬ紅しけ文の单田安の中
将殿もおなし直衣小あふひのもん火いろのきぬ紅しけ文の単になむ
有ける三家のそりう四位の人々ハ二の間の北にて南にむかひ譜代菊
の間大小五位の面々布衣の輩二三の間をかけ西にむかひて居なミた
り四の間にハ大番のさふらひ五十人虎間に両番のさふらひ各五十人
すわをきてつらなりたり南のいた敷に虎間の大名北にむきてなミ居
高家奏者番のたくひハ南にむかひて坐せり溜間詰両御所のすく老た
ちハ西のた、みえん勅使のうしろにおらる8ウさ、山侍従青山下野守ハ柳
かさねのきぬ沼津侍従水野出羽守ハ若艸小田原侍従さくら西尾侍従松平和
泉守乗寛朝臣も、わかさ侍従源忠成朝臣柳岩むら侍従松平能登守 源乘
保あそん葡萄のきぬ単ハミな黄しけ菱の平絹なりひとり岩むらし、
うの袖くちの白かりしハよハひの猶立まさり給ふにやあらんよそち
にミたさるハ紅の单老の堺にいりたるハ黄おひを重ねし輩ハ白きを
用ふるとかひとのいひしかさもやありけんかし

摂津守紀正敦山端

こきませし袖のにはひそた、ならぬ9オ
ひなとみやこの柳さくらを

あまりにさうそくのことかそへたてむもくさくしとてやミぬ鶴の
溜にハ法印法限御簾のことうけたまはる中奥の輩西のひさしの間に
水戸殿紀伊宰相殿ミんなミにむかひて坐せられ其かたはらに少老及

ひ近侍の人々おく中奥孫のことつかの面々衣冠下かさねしてすき間もなく
なみ居たり御かたはらの人よりあないありて御すたれをあく公卿の
楽器ハ中おくの輩ひとりくもちいて、各のまへにをく殿上人のハ
中奥の番士かりにあを色のうへのきぬきて9ウもていてぬ徳大寺大納
言花園権介ひハ四辻大納言和琴同中納言綾小路三位さうのこと父の
中納言しやく拍子とりてあなたうとうたひ出せるに綾小路持明院の
両三位ともに声うちそひたまへハかくそのものともまちとりて折に
あひたる双調に吹いてつ、堂上にもひきあハせたる玉琴のこゑ
く空にすミわたり雪をふらし瓦をくたくハかりになむおほえけり
をた原侍従

いにしへのかくや有けむいにしへの10オ
そのいにしへにまさるミあそひ

にしお侍従

いにしへを今にかへしてかしこさを
あふきてそきくけふの糸竹

日向守巨勢利和師

いにしへもためしきこへぬミヤひとの
もの、ねあそふけふのたふとき

けふのむしろにあらざりしかと 季文北む

折しもあれはるも弥生の花さかり10ウ

またミぬ鳥の声そきこゆる

むしろ田うとふをき、て

小田原侍従

ミヤ人のとなふる声のあやむしろ
君にと千代をゆつるかしこさ

にし尾侍従

稲くさのくちぬためしと友つるの
よろつ代かけてあそふ席田

利和^{11オ}

むしろ田のいつぬき川のいつまでも
このミあそひをためしにハせん

季文

めつらしきけふのミあへの席田は
おりかへしてのあかしとそおもふ

鳥急の残こりかくを

春の日の空にまきれぬもの、ねの
のとかに御世ハしすまりにけり

胡飲酒を^{11ウ}

世ははるの風のしらへにくれ竹の
この国人のゑひをすゝめて

けふのたうとさはいにしへもかくや有けんしらすた、迦陵ひんかの
声をきゝつゝ、栖つるの千年をかねて遊びあへるをみるに心も空にあ
くかれぬるこゝちそする五曲終り律に調子をかふる程ミや原侍従よ
り駿河守源家長朝臣^{少種むら}あないして御簾をたるこのあひた管弦の人々
あからさまにかくやにしそきとはかりありてまへのこと坐につかる
かくそのものとももありしやう^{12オ}にゐなミたり中奥の輩かくきもて
いてゝのち又御かたはよりあないありて御簾をあくいせの海清き
渚のとさう歌し給ふ程平調にしらへし糸竹の声くゝいふもさら也

をた原侍従

けふこゝにひろふも嬉し伊勢の海の

千ひろのそのなミのしほ貝

西尾しゝう

末遠きいせのうらなミうちよする
きよき渚にたまやひろはむ^{12ウ}

和琴を聞て まさあつ

よそにのミきゝし雲井の琴のねの
あつまにひゝく声そたへなる

つきハ萬さいらく五常らく

よろつ代の声もおさまるよつの緒に
いつゝのつねのしらへをそきく

季文

むかしきくミなミの山のやまひこも

けふのひゝきにいかてまさらむ^{13オ}

なを聞えしかとかきもらしつるも^{13ウ}ばかりをのくのかくきおさめろ
くもちいつ大中納言ハ白あやにくれなゐのうらうちたる御そく各一
かさね三位ハくれなゐのりんす赤いろのうら四位ハ薄くれなゐにあ
か色のうらなりいにしへ大けうのろく納言に白掛参議に紅のうちき
なと見えしになすらへられしにやあらむひとりく打かつきつゝま
かつるさまこそめの梅に雪のかゝりたるけしきしてめもあやなりミ
なまかてゝ後御すたれたるかゝそのものともに各色絹打かけ^{13ウ}
たりかつきつれてきさはしをおり庭上をあゆミゆくありさま春のお
まへに秋のこのはを吹ちらしけんこからしのなこりにおほへてたゝ
ならす入御の後白書院にしてあけしまうけあり勅使院使にハうすは
ん七五三なら臺をさへのたいをいたさるさゝ山侍従ミつかひなりか
んたちへうへ人ハ紅葉間うすはん金銀の料理ぬま津侍従御使にてさ

かつき臺をたふうへ人ハまるすミのあしうちにすはまをたまへりかくその者ともハ檜の間なり三家のかたくを始さふらふかきり¹⁴⁷宴をたまふ勅使をはしめかんたちへ殿上人申の刻へる比ミなまかんでらる

ミかきのふのかく器とも御覽あり中にもよつ辻大納言のしくれとなつけしさうのこと花園の波竜とかよへる琵琶なむこたいなるものにてわきてこよなかりける其ほかとく大寺大納言のひハを白雨といひ四辻の箒を菱といふともに神田はる貞つくりしなり綾小路三位のさうハ作者の名詳ならずとなん

よか両御所御ひた、れにて白書院に出させ給ひて¹⁴⁸勅使院使に御たいめんあり年のはしめのミつかひはたことさらに音かくたまはりしかしこまりをも奏せさせ給ひけんかし西の御所もまた同じ廣はし一位白きからの綺のかりきぬ香窠のもん青くち葉の奴袴赤大口甘露寺たいなこんひそく色に杏葉から草のもんあさきをりもの、さしぬき冷泉中納言檜皮色から鳥のもんあさき織もの、さしぬきなり勅使を始公卿殿上人に帰路のいとまをたまひ傳奏の両卿へ白かね五百ひらわた三百むら西の御所より二百ひらに百むら¹⁴⁹院の傳奏へしろかね三百ひらわた二百むら西の御所より百ひらに百むらをたまふ御たい所若御臺所よりの御をくり物例のことし徳大寺四辻の両大納言三百ひらに二百むら西の御所より百ひらに百むら御臺所わかミたい所よりをのくこふく六くたり四辻あやの小路両中納言へ三百ひらに百むらにしの御所よりをのく五拾両御臺所よりこふく五くたり綾小路持明院ふたりの三位へ各二百ひらに百むら西の御所よりミそひらにいそむら御臺所ふた方ハ上に同じ花園へ百ひらに¹⁵⁰五十むら西の御所よりはたひらにミそむら御ふた方よりこふくをのくよつをかつけら

るかくそのものともにも各白かね十ひらこふくふたたりを恩賜あり御所のハさ、山侍従西の御所ハ岩むら侍従これをつたへらる三卿かさねて御まへにいて、御いやをのへらる徳大寺大納言を始花園にいたる迄ミな同じこの日徳大寺ハ綾比金襴¹⁵¹のかりきぬ唐鳥のもん¹⁵²外¹⁵³のさうそくはいぬるついたちに同じ四辻大納言香色から花菱のもん同中¹⁵⁴なこん青色のから織竹立わきの文綾小路中納言香色のかりきぬ同三位桜のかりきぬ竹立涌¹⁵⁵のもん¹⁵⁶持明院三位うす色けん文紗から草の丸花その権介こき花田から花の文うす色綾の袖く、り

いつか又参向の人々をめさる両御所御ねりぬき長袴大廣間にて御たいめあり例のことあけしまうけありてさるかくをもよほさる能はしめハけん蕃のかミ意正朝臣¹⁵⁷てん頭のやくハ志摩のかミみなもとの親明朝臣¹⁵⁸なり廣はしのかりきぬハ花田打平紋白雲立涌¹⁵⁹の文甘露寺綺のかり衣白地紫の牡丹冷泉ミる色にみるのもん徳大寺綾えひ色海松の文¹⁶⁰東大寺うつし¹⁶¹四辻鳳凰の丸とを文其子中納言二ッ色練うすもの藤のもん綾小路長けん其子三位香色牡丹からくさ持明院白のかりの綺に青き雲立わき花園うす色かりうち藤立わきすたう綾の袖く、りのわきて花やきたるもおかしさしぬき下袴などハ大かたありしにたかふことなしこの日のさはふ八年ことにかはれるふしもなければもらしつたつの半にはしまり¹⁶²さるのさかりにことをはりぬ

十あまりひとひこたひのあらまじうけたまはりしとはなかりしかともはら其事にか、つらひし労をおほしめされしとて肥後守忠英¹⁶³はや¹⁶⁴次¹⁶⁵明してうちくよりさ、山侍従へ後藤廉乗かつくれる蘿蔔の三所ものをたまひ正あつにもよにさうふ草とよひてもてはやせる染かは三むらを恩賜あり正敦かたくひ何はかりのかうもなかりしにかくおほんめ

くミをかうふりしことのかしこさあまりに」^{17ウ}

やふしわかぬ春のひかりに数ならぬ

かきねの草のめくみをそそふ

卯月十一日なをかしこまりを聞えあげ給ふとてうちへ濡ちむミそ
卷御たる二荷さかな三種院へはたまき二種一荷西の御所よりしゆす
はた卷二種一荷院へ十まき一種一荷をまいらせられしとなむまこと
やこの春のことく百敷の大宮人あまた下されてミあそひ有しを雲井
なす遠きむかしハしらすあし垣のまちかきよにはそのためしも聞さ
りしにかゝる御うつく」^{18オ}しミのなミ関のこなたにあふれはこやの山
をてらす日のおほんひかりさへさしそひつゝ院の御所にて試かくな
とをもミそなはし給ひしとかやけにかしこきミよの御さかへにこそ
有れかくいふハ文政むとせやよひのことなりけり」^{18ウ}

此一冊者若年寄堀田撰津守殿
所被撰抄物也更令書写之訖

于時文政六年五月十九日

隠岐守豊原朝臣文秋（花押）」^{19オ}